



植物への関心高まるか

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 理事
北陸支部長
長澤 裕滋

北陸支部のある長岡市の今冬の降雪・積雪状況を見ると、12月17日までは0cmでしたが、20日には102cmと急増し、各地で車の大渋滞が発生しました。初雪が大雪となりびっくりしましたが、1月20日の午後には0cmと急減しました。続いて平年の日積雪量が多くなり始める1月29日には再び101cmとなり平年並みかかと思っていたら、2月27日の正午には0cmとなりました。

その後は春まで暖かい日が続き、桜の開花も早まり、ここ雪国長岡でも入学式に桜が咲くことが普通の光景となってきたのかと思うほどです。桜だけではなく、色々な草花や庭木の開花が早まり、草丈も大きいような気がしています。

気象の変動幅が大きいことや、気温の上昇が身近になっていることを感じさせられています。

さて、NHKの2023年前半の連続テレビ小説は、高知県出身の植物学者牧野富太郎博士をモデルにしたオリジナルストーリーですが、これを契機に今後雑草を含む植物に関心が高まることを期待したいところです。

週末に周辺を歩いていて気付いたことを2つ紹介したいと思います。

まず、道端の草にも目に見える変化があることです。そのひとつがコバンソウです。この草は以前は新潟市の海岸近くでしか見られないと思っていました。薄緑色で卵形の小穂が初夏のさわやかな海風に揺れるのは風情がありますが、ある頃から長岡でも見られるようになってきて、年々分布が拡大しているようです。もうひとつは、カラスノエンドウでこれも発生面積が拡大しているように感じられます。私だけの感想かと思っていたところ、北陸地域の方々が同じ意見でしたし、違う草種の雑草も増えていることも知りました。

同じNHKの「チコちゃんに叱られる」でも、「雑草とはなにか」という問題が出ていました。その中で、カラスノエンドウ等の野草を食する名料亭が紹介されていました。また、春の七草の内、大規模に栽培される野菜はスズナとスズシロの2種との説明がありました。もちろん食用にセリ等は栽培されていますが、ほ場で簡単に見ることができます。

食用にする雑草(野草)でまず浮かぶのがヨモギです。農道・畦畔のどこでも発生していますが、新潟県の名物の笹団子に

はヨモギの新芽が利用されています。また、オヤマボクチも利用されています。オヤマボクチ(別名:ヤマゴボウ)はキク科ヤマボクチ属の多年草で、和名は葉裏の茸毛を火起こしの際の火口としたことに由来するとされています。新潟県では「ごんぼっば」等と呼ばれ、葉が笹団子に利用され、福島県や山梨県(「うらじろ」と呼ばれる)等でも餅に利用されています。また、新潟県や福島県・長野県など各地で蕎麦のつなぎとして利用されています。現在はオヤマボクチも栽培されているようです。

気付いた点のふたつ目は、農地だけでなく市街地での帰化アサガオ類の増加です。6年ほど前の秋口、転作大豆に覆いかぶさるようにマルバルコウと青色のアサガオ類が大発生しているほ場を見付け、その後毎年見えています。完全な除去は難しいようです。また、川堤防上の道で市街地側法面にマルバルコウが発生していて、年々面積が拡大し、川側の法面にも発生していました。また、その川沿いや庭先で転々と発生が見られました。特に最近水田から宅地化された土地に建つアパートの看板下に発生していましたが、以前に観賞用としてその地点で栽培されていたとは思えませんでした。

以上、私の個人的な観察と感想であり、認識違いがあるかもしれません。

野草や雑草が刻々と変化していること、点々とアサガオ類が発生している要因は何でしょうか。気象の変化と周辺の植物への関心を持ち続けたいと思っています。

最後に当支部で発行している「日植調北陸支部だより」の一部を紹介したいと思います。20号(2020年9月発行)に森田弘彦先生から「北陸地域のエゾノサヤヌカグサのよま話」と題する記事を書いていただきました。

エゾノサヤヌカグサは北海道を中心に発生する雑草ですが、北陸各県で発刊された植物誌には、以前からその記載があると示されています。

「北陸地域の水田でのエゾノサヤヌカグサは、植物生態学の研究者の目に留まっても雑草とその防除に関わる研究者の目には留まらないのでしょうか。(中略)植物生態学関係者が持っているエゾノサヤヌカグサの知見に、雑草学関係者が無関心でよいはずがありません。」と指摘されています。